

## 三輪の神様 (三輪)

三輪の地は、弥生時代より米作りが盛んにおこなわれて  
いる、暮らしやすい里でした。ここは、広い土地が武庫川  
沿いにあり、山すそに向かつてゆるやかな傾斜があるた  
めに水害にあいにく  
かったのです。

あるとき、大和の  
人がこの地に移ってき  
て、三輪の神様をまつ  
り始めました。そし  
て、神様のご加護を受  
けておだやかに暮ら  
しておりました。

この三輪の神様はた  
いそう仲のいい夫婦  
の神様だったそうで  
す。人々が汗をかきな  
がら米作りをする様子



を毎日見守っておられました。

ある時のこと、男神様は三輪の周辺以外の土地について  
ほとんど知らないことに気付きました。そう思つて遠くを  
見渡してみと、羽束山のふもとの香下あたりに、神様がお  
られるのが見えたのです。すぐさま、大道坂を越え、その  
神様のもとへ行つてみました。

すると、香下の神様はとても見目麗しい女神  
様でした。香下の女神様は、にっこりとほほえ  
みながら言いました。

「初めてお会いします。このあたりは、とて  
ものどかですばらしいところですよ。あなたが  
守られている土地はいかがですか。」

大和から移ってきて以来、男神様ははじめて  
ほかの神様と言葉を交わしたのです。香下の女  
神様の美しさにすっかり心を奪われてしまいま  
した。

それからというもの、男神様は香下の神様の  
もとへたびたび行くようになりました。

女神様は男神様の様子を見かねて、とうとう  
怒りました。

「この地をあなたとともに見守っていいこうと思っておりますが、もう我慢ができません。」  
と言つて、社を飛び出しました。

女神様は目立たないように、みすぼらしい病人に姿を変え、湯山（有馬）の方に向かつてゆつくりと歩きました。その姿を見た道行く人はさけて通り過ぎていきます。誰一人声をかける者はいません。

そこへ、一人の僧が、病人に近づき、声をかけました。この僧は行基といいました。

「どこへ行かれるのですか。」

「わたしは全身に悪い傷があります。ここより北の湯山の山あいに出湯があるそうですね。どうかそこへ私を連れて行っては下さいませんか。」

「わかりました。でも、その傷で歩いていくのは苦しいでしょう。私がおぶつてさし上げましょう。」

そういつてすぐに行基は病人を背におぶつて歩き出しました。言われたとおりに湯山に連れて行き、病人を温泉に入れてやりました。

「体の傷がうんで（化膿して）、かゆくてたまりません。どうか、傷口を手当てしてくださいませんか。」

「わかりました。手当ていたしましたよ。」

行基はためらうことなく、体中の膿を口で吸いとり除いてあげました。

すると、どうしたことでしょう。さきほどの病人は、たちまち金色の薬師如来の姿となつて輝きはじめたのです。その薬師如来は、三輪の女神様のもう一つのお姿だったのです。

「あなたのやさしい心持ちで私は救われました。この地を見守ることでこの恩を返しましょう。」

と言ひ残し、紫の雲に乗り、東方へと去っていきました。

そして、三輪の女神様は温泉神社の神様となつたのです。行基は神のお力になれたことに涙し、すぐに如法経を写経し、泉底に埋めました。ついで、等身大の薬師の尊像を刻み、山麓にお堂を建てて安置しました。現在の薬師堂です。

こうして、それぞれの地で神様は人々の暮らしを見守り続けています。

☆有馬温泉の開湯に伴う伝承では、「三所大明神御体の事、一所温泉女体東方浄土薬師垂迹、一所三和大明神毘舍那俗体、鹿舌大明神千手観音女姿体」（温泉山住僧薬能記）とされています。